



第73号

編集室 〒794-2114
愛媛県今治市吉海町
名2916-2 高龍寺内
TEL 0897-84-2129
FAX 0897-84-4495
Eメール info.koryuji@gmail.com
責任者 鴨井 智峯

菩提樹

暑中御見舞い申し上げます

高龍寺 院家

せがきほうよう

お盆明けに勤められている施餓鬼法要は、江戸時代より途絶えることなく毎年行われています。島内の寺院住職が出仕して、真言宗で最も丁寧な中曲理趣さんまい三昧法要を勤めて、亡くなられた方々を弔う法要を勤めております。

各世話人さんやお寺からの郵送にて申し込みを受け付け総代会主催で法要を執行しております。

お申し込みを受けた仏様の戒名を書いて霊膳を供え、本堂では戒名を読み上げて御供養申し上げますので、どうぞお申込みの上ご参拝下さい。

合掌

施餓鬼法要 8月18日 午後5時～7時



龍光さんプロフィール
1974年、札幌生まれ。
2022年8月までライブ配信アプリ「17LIVE（イチナナ）」のグローバルCEOを務め、日本のIT業界を牽引するが、数字を追い求める資本主義に疑問を感じる日々であったところ、インド仏教の最高指導者である佐々井秀嶺と出会い得度。現在は、お金も地位も捨て、依頼があれば日本全国を行脚する日々。

「先達と徒歩で巡る島四国へんろ市」にご参加を！

島四国では、島内寺院の僧侶が3日間日替わりで先達を務める「先達と徒歩で巡る島四国へんろ市」を毎年行っております。

2年で一巡するため、1日10kmほどの距離を、歩き遍路でゆったりと巡拝します。今年の島四国では、龍光さんにご友人の皆様など、たくさんの方にご参加いただきました。大島の美しい風景や、各札所での「お接待」でのあたたかな心遣いを大変喜んでおられました。

来年の島四国は2026年4月18日（土）～20日（月）の日程で実施いたします。龍光さんは来年の島四国も参加されます。参加希望の方は、前日までに電話にて事務局へお申し込みください。（伊予大島准四国霊場会事務局 法南寺 0897-84-2155）



高橋浄休さんによる島四国のお遍路の様子をまとめたYouTube動画ができました。ぜひ、ご覧ください。



【JQUEST 日本編】えひめ大島 島四国遍路 2025 胎蔵界コース 4/19-4/21
<https://www.youtube.com/watch?v=ypWmj9u9jQg>

お坊さんは何処からやって来る？

高龍寺 住職 鴨井智峯

お盆が近づきますと、町角でスクーターに乗ったお坊さんを見かけると、これはお盆の棚経たなきやうで檀家さん宅をお参りしている姿なのですが、比較的若いお坊さんのおつとめだったりします。このお坊さんたちは何処から来たのでしょうか？

明治になるまではお坊さんは家庭を持ちませんでしたので、檀家さん宅のお子さんやお坊さんになりたい子供をお寺が預かり、お坊さんになるための勉強や修行を重ね、お寺の後継者に育てていました。明治以降はお坊さんも家庭を持つようになり、お寺で生まれた子達が本山に上って修行をして、後継者になることが多くなりました。他には在家（一般家庭）で生まれ育った子がお坊さんになりたいと願い、縁のあったお寺を通じて本山に上ってお坊さんになった方もおられます。中には出会った彼女がお寺の娘さんだったのが縁で、お坊さんになった方もいます。

私の場合はどうだったのかと申しますと、昭和34年に愛媛県にある四国霊場63番札所吉祥寺で生まれました。1歳の時に住職を勤めていた父が遷化せんげしたことでお寺を出て、母が在家で育ててくれました。物心付いた頃にはお寺に隣接した家で暮らし、ご近所の人たちからは、お寺の坊ちゃんと言われて育ったので、「自分の存在場所は何処なのだろう？」と思うようになりました。そんな中で人生の方向に大きく影響を受けた出来事が中学3年生の春に起こります。母が「お父さんから手紙が来たからあんな読んでみなさい」と言われ、茶封筒を渡されました。封筒の中には7枚の原稿用紙が入っていて、所々に日付が記入されています。手紙の最後ある日付は、父の命日の数日前でした。

手紙の書き出しは、「今は夜中の2時半頃。隣のベッドからは微かな寝息が聞こえる」とあります。夜、寝られなかったのでしょうか。文面には「お父さんが死んだらあなる、こうなる」と思うことが書かれ、「今、君に言い聞かせたいけど、まだ君はお話しすることができないのが残念」と書かれていました。「この手紙を読む頃には自分の人生が想像できる年齢になっていると思う」の後に「学校の先生や俳優でも良い。でも、お父さんが進み始めた仏の道に進んでくれるのがお父さんは一番嬉しい」と記されており、最後の1枚は何を書いているのか、ほとんど読めませんでしたが、何かを伝えたいという気持ちが強く伝わりました。

丁度通っている中学校に実家がお寺という先生がいて相談したら、高野山に行く道筋を付けて下さりました。この先生は定年退職後、お寺の住職として勤められて近年遷化。一生のお付き合いを頂けたのは、この上なく有難いことでした。

高野山では宿坊に寄宿し、お寺の手伝いをしながら日中は高校に通いました。朝の勤行、宿泊者への給仕、雑巾がけなど、寺内の用事を済ませて登校し、授業が終われば宿坊に帰ります。宿泊者への対応など、日々の仕事に追われ、自由な時間はなかなか取れません。これが何年続くのだろうと途方に暮れる思いをしたこともあります。そんな中で自分を支えてくれたのは、全国から来ている同級生の友人たちでした。色々な境遇の下で親元を離れて来ている友人たちは、かけがえのない存在でした。お互いを慰めたり、励ましたり、50年経った今も当時のままのお付き合いをさせて頂いています。彼らは人生の宝ものだと確信しています。そして親元で暮らした15年間は、本当に親に守られた所だと痛感したことも忘れられません。

全てが順風満帆ではありませんが、テーブルの隅をかるうじて落ちずに通り抜けたような高野山での10年間。今思い返すと、自分の人生の土台を作ってくれた時代でした。この時のすべての経験に感謝しています。

父の50回忌をつとめたとき、母が「このお父さんからの手紙はもうあなたが持つておきなさい」と渡され、35年ぶりに父からの手紙を読み返しました。父親の年齢はどうに越していた私でしたが、父は最後の最後まで家族のことを思い続けていたということに改めて痛感。より父の存在を大きく感じることができました。

何時か、私も父が往った方にゆくことになると思いますが、こんなに大きな生きる道を書き示し、残してくれた父に、あの世で会えそうな気がします。色々言いたいことや聞きたいことがたくさんあり、その時が楽しみだと思っています。

随分昔に高名なお坊さんから「僧侶は師僧が育てる 住職は檀家が育てる」という言葉を聞きました。長年どういう意味だろうかと思っていましたが、近年、私も含め全ての人々は、ご縁で育てられていると確信するようになりました。最初からお坊さんなんていないのです。様々な出会いや本人の発心、その上での修行が経験値となって、お坊さんに育っていくのです。

ところで、その後の我が家はどうかをお話させていただきます。私には二人の息子がおりまして、教育方針ではないのですが、「大きくなったらお坊さんになってお寺を継ぎなさい」とは一度も言わずに育てました。お寺に生まれ育った子は小さい頃に友達の家遊びに行くと、「お寺の子？ それなら大きくなったらお坊さんになってお父さんの後を継ぐのだね」と言われるので、意識して一度も言いませんでした。ただ「お仏飯ぶつめんを頂いて生活しているのだから、お寺の手伝いはしなさい」と言い、保育園の頃から庭掃除や施餓鬼法要の時の900組の靈膳作りを手伝わせていました。おそらく日本中のお寺に生まれ育った子たちは、ほぼ同じように育っていると思います。

長男が高校3年生になった春、進学のことです。「僕は高野山大学に行ってお父さんの後を継ぎます」と言われました。次男は「兄ちゃん継いでくれる？ それなら僕は好きなことをして良いんやね」と言い、それぞれ思う道に進みました。息子たちはお互いに「お寺どうする？」を子供ながらに考えていたことを改めて知ったのでした。

長男は高野山大学に通学するにあたって、私が過ごしたお寺に預けるようにしました。私が過ごした時代は、お寺に寄宿がほぼ当たり前の時代でしたが、40年経つと高野山でもアパートなどが主流になっていましたので、家内からは若干の反対がありました。しかし、全てを経験することが重要と思い、お寺に預けました。でも別れ際に、息子は高野山のお寺の玄関廊下に正座して、合掌で見送ってくれました。息子がこれから日々続けることがどのようなものであるかを体験していますので、流石さすがに涙腺がゆるみ、涙を流しながら高野山を下りたことが忘れられません。

息子を高野山に残して帰って、しばらく日が経っても音信がないことに、だんだん心配になってきました。今の時代ですから、携帯メールで「元気にしている？ 友達できた？ お金ある？」あれれ？ どこかで聞いたフレーズ。そうです、歌手さだまさしさんの「案山子かかし」という曲です。どこに居ても親の心は同じですね。そうしたら、寝る頃に息子から返事が来まして、そこには一言「心配ご無用」とありました。

長男は高野山大学卒業後、仁和寺密教学院で修行して自坊に戻り、副住職として汗をかきながら日々研鑽中です。当地方は昭和から平成の最初の頃は、まだ平日の夕方からの法事が多く、檀家さん宅で夕食を頂いて帰ることがよくありました。食事を共にすると檀家さんの生活ぶりや思っていることが垣間見えます。檀家さんを理解する上で、とても大事だと思いましたが、今の時代、そのような席は滅多にありません。息子には「お経を拜んで終わりではなく、体験談でも何でも良いから必ずお話を一つしなさい」と言い聞かせています。来年住職交代の予定ですが、親から見れば子供は頼りなく見えるのは当たり前。私のこれらの修行は、息子にあれこれ口出しせずに見守るということなのでしょう。